

## 日本的「平和」思想の淵源を訊ねて

保坂 俊司

「平和」は日本の伝統か？

文明融和宗教としての仏教というのが、今日を中心ですが、今、世界中でIS（イスラム国）とか、テロリズムとか、ウクライナ問題、東アジアのもめ事、紛争等がたくさんありまして、しかもそれらに宗教が絡んでいたり、文化、文明が絡んでいたり、原因もいろいろありますが、正直もうちょっと「平和」にならぬいのかという思いがあります。

しかし、ふと考えてみますと、じゃあ「平和」って何だろう。と、基本的な事を考えました。私たちは一般に、「平和」を論じる時には、謂わば常識化され漠然とした「平和」の意味を前提に考えます。しかし、その漠然とした「平和」という言葉の持つ意

味の背景について、改めて考える事はあまりないようです。たまにあっても後に簡単に紹介するような英語の *peace* の翻訳語としての「平和」であり、日本古来の平和に当たる言葉とそれがどのような関係にあるのか、ないのか？ あらためて考える事はなようです。ですから、「平和論」や「平和学」の学術的な専門書でも、その概念規定は当然ながら、英語などのヨーロッパ圏で形成された意味内容です。まあ、それが日本の近代の特徴なのです。

しかし、それで本当に日本人の心の琴線というか、文化の核心に触れるものが育っているのか？ 私は常々疑問に思っています。変な言い方ですが、木に竹を接いだような言葉で、はたし

て私たちの平和が、日本精神史上に共通意識として共有されて、また現代人の心の底に届くのか、ということがちよつと気になります。そういう意味で、先ず平和という言葉について、簡単に考える事からはじめましょう。

私は仏教、いろいろ宗教を比較するという形でやっておりますので、別に仏教を殊更持ち上げようという気はありません。一応、日本的仏教徒であり、また専門もインド・イスラムとかシク教というインドの中世にできた小さな宗教を専門にやっております。しかし、宗教学やインドの宗教を研究してみても、仏教が持っている不思議な思考方法、それは不殺生とか、慈悲とか、空というようなですね、つまり自己絶対化をあえて否定、或いは相対化する思想ですが、この思想の価値に改めて気付かされるのです。しかも、それが日本のかつての伝統文化の核心を為していたという事実をもっと実行する必要があると思っております。

特に、この自己を絶対化しないという思想が、自分本位の正義観が激突する今の世の中で、もうちよつと柔らかく生きるつまり、私が表現する日本的な平和である「温かい平和」の思想が、紛争の鎮静化のために必要なんじゃないかなという気がいたします。この問題を、今回は非常に簡単ですが、話させていただきます。(以下では、平和という言葉の意味背景を明確にするために

便宜的に「平和」と平和とを区別して述べます。又、両者の区別が不要のときは、単に平和とします。)

### 「平和」という翻訳語

二一世紀の現在平和と言えば当たり前のように、「戦争のない状態だとか」ついつい「世の中が穏やかでうんぬんということ」と、国語辞典的に考えてしまいますけれども、そもそも平和という言葉はどうやってできたんだろうと。まず、漢字ですから、「平らかに和す」と解釈できますが、専門家に尋ねましたところ「平らでおだやか」と解釈するそうです。しかし、一般的な漢和辞典には平和という熟語は、あまり見かけません。現在の用例はありますが。漢語としての歴史的用法は、明確ではないようです。どうも、近代になって翻訳語として、一般的に用いられるようになったみたいですね。<sup>1)</sup>

では意味的に、近代以前だったら現在の平和に当たるものはどういう言葉なのでしょう。先ず思い当たるのが、「天下泰平」とか、こういう言葉ですね。あるいは「平安」、「安穩」ですね。あるいはもつと言えば、「鎮護国家」の「鎮護」みたいなのがあります。これらの言葉は、明治まではよく使われていました。

どうもわれわれが平和を考える時には日本語ではなくて英語つ

まり、ヨーロッパのピースの概念が強いんだろうと思われれます。このピースは、ラテン語の *pax* (平和、和睦、無事、平安、平静など) から来ており、さらにそれは *paco* (支配下に置く、屈服させる。服従させる。云う事を聞かせて静かにさせる。更に辞書的には、征服後に平和にする。平定する。平和を課す。支配下におく。屈服させるとなる。) を語源とするとされています。とするとピースとは、日本語の「泰平・平安」とは、かなり異なる！しかも、*peace* の反対語は *war* (戦争) ということになっているのです。

さて、このパークスのもとになるパークーが問題です。伊東先生の前でラテン語は憚られるのですが、パークーとは、力で相手を押さえつけ、圧倒し、服従させるみたいな感じですよ。だから結局、簡単に申しますと、強い力があって、抑えつけていけば、つまり秩序だっていれば表面上は「平和」状態は形成維持できるのです。つまり誰も反論、反抗しないから社会は一見、落ち着いているし、安定して見えます。しかし、ここで欠けているのは心の問題、内面の状態なんです。奴隷制だって、パークス(英語ではバックスですね)ですよ。

つまり、外見は非常に安定していて、表面上は争いが無い。でも安穩ではないですよ、心は。見かけ上は安穩ですけど。つま

り西洋の *peace*、あるいは翻訳語としての「平和」という言葉には、人間の内面に関する考察は恐らく含まれていないか、軽んじられている。これはヨーロッパの「平和」の概念の、*peace* の概念の特徴なんだろうと思うんですね。ローマの人たちは奴隷制でしたし、人口の三分の一が奴隷だったと言われています。一般市民は、彼らの心の葛藤や不満など気にもしなかったはずですよ。

しかし、やっぱり東洋、つまり日本人が、平和という言葉に込めているのは、つまり日本的な意味の平和とは、他の言葉で云えば、安泰だとか、太平楽だとか平安とかとなるでしょう。ここには、心まで入っていると思うんです、人間の内面です。つまり例えば、夫婦で冷戦状態。けんかもしないけど口も聞かないというのは、これは西洋の意味では「平和」なんです。*peace* ですよ。だけど、日本的に言えば平和(安泰や安楽)ではないんです。奴隷制や封建制に様な力により秩序が保たれた状態が、「平和」ということです。謂わば、冷たい「平和」です。ヨーロッパの「平和」はまさに、制度としての安定した状態を意味している様です。少なくとも其の面が強い。この点が日本人の平和のイメージとは異なるのですが、それが余り理解されていないように思われます。少くとも両者が混在している。

要するに僕は、日本人が「平和の言葉」とか「平和の誓い」と

か言う時の平和はイコール peace じゃないんだろうと。つまり、日本人が平和という言葉を用いる時と、アメリカ人が peace を考える時とは全く違う文化の背景があるということです。文化の差があるのですから、当たり前のことですが、しかし、問題は、その差異が意識されていないという点です。

つまり、私たちは、力ずくの「平和」、冷たい「平和」ではない、日本の伝統を生かした「温かい平和」の存在を意識して、新たに平和の概念を作り出す必要があると思うのです。

次に、「温かい平和」という意味を考えるために、翻訳の歴史を簡単におさらいします。peace は最初にどんなふうに使われていたかということですが、最初の英和辞典とされるヘボンの辞典を読みますと、これは一八六一年上海で印刷されました。もともとは全部ローマ字です。「泰平、穏やか、安心、安穩、和睦」となっています。また、近代における学術用語の決定に大きな役割を果たした井上哲次郎他『哲学字彙』（第一版は明治一四年）では「peace」には、「平安、寧靖」とあり、ようやく第三版の明治四四年版に「平和」が掲載されます。つまり、最初 peace は、日本的に「泰平、穏やか、安心」とか、心の内面まで踏み込んだ意味で、つまり、日本の伝統的な平和の状態があらわされています。なかなかヘボンがよく、日本の文化を研究しているなど思

いました。

つまり、日本の伝統的な人間の内面を含む心の平安ですね。安寧と安定した秩序の面が今、われわれが使っている平和にあるけれども、西洋のものには乏しいと。つまり条約なんかのレベルの平和ですね。

ところが、その後「平和」が優勢になる。歴史的には余り用いられなかった平和が、西洋の文化が浸透するとピースの訳語として登場する。そして、現在の日本語の平和には、①西欧伝来の秩序としての「平和」と②日本伝統の人間の内面の平和（心の内の安寧、平安）の両面が混ざり合って用いられている。しかし、戦前には、あまり平和という言葉は、用いられなかった様です。それが多用されるようになったのは、第二次大戦の敗戦後です。

#### 敗戦後の世界から生まれた平和

平和という言葉が、ことさらに強調されるようになった背景、特にピースの訳語が、平和として一般化するようになったのは、恐らく現行憲法が、アメリカによってその素案が提示されたことと、悲惨な戦争とその敗戦を心底反省した結果ということではないでしょうか。故に、現在、我々が平和を考える時には、現行憲法の序文にある「平和」という言葉にそのよりどころがある

ように思われます。それによれば、『昭和憲法』の「序文」は、決して長いものではないのですが、その中で「平和」という言葉は、執拗とも言えるほどに繰り返されています。特に、「平和」を求める理由として、「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、」と明示されているので<sup>2)</sup>。

この時の英語の原文は、ピースが対応していることは、よく知られていることです。つまり、現在の平和という日本語の意味には、ピースに加えて、二度と戦争を起さないとという意味での、つまり戦争の反対語としてのピースの平和という意味が強いということ<sup>2)</sup>です。

これでは、先ほど来申ししているように、日本語の「天下泰平」、「安穩」の様な、心からの平安状態としての、つまり、単なる社会の制度や戦争の抑止、社会的表面的な安定に止まらない、一人ひとりの心からの平安が確保され、さらにそれを互いに共有した状態の平和<sup>2)</sup>ではありません。これを私は、謂わば冷たい「平和」と呼んでいます。一方日本人の伝統的なものは、人間の個々人の平安のみならず他者ともこれを共有するという意味で「温かい平和」関係と考えています。そして、日本の伝統に即した意味での平和<sup>2)</sup>の意味を再確認するために基礎作業として、次に「温か

い平和」について、考えてみたいと思います。但し、日本人は自らの伝統を無意識下に多少意識しているので、両者が混同されているように思われます。

ですから、このピースの「平和」（冷たい平和）に、泰平や平安、さらには鎮護というような日本伝統の精神を付加した温かい平和観の形成と自覚が今後必要になるのではないか、と思われ<sup>2)</sup>ます。

#### 原点としてのインドにおける平和

さて、日本においてこのヨーロッパとは異なる平和、つまり「温かい平和」の思想が如何に形成されたか、ということは大きな問題です。この点は今後とも検討を続けてまいります<sup>2)</sup>が、本日は、この「温かい平和」つまり内面からの心の平安と、さらに他者との親身共存（以下原則、この意味で平和と表記します）を考<sup>2)</sup>える上で決定的な影響を及ぼしたのは、仏教ですから、先ずこの仏教における平和について、考えましょう。

インドでは、平和という言葉は「シャンティ (santi)」と言います。インド思想の特徴は、人間の内面をまず重視いたします。何故、内面を重視するかというと、創造主としての唯一絶対神がいませんので、人間の発生と言いますか、存在理由が問題となり

ます。そうすると心と体の二面を持つ人間存在の意味を考えなくてはならないのです。一方、唯一絶対の創造主を持つユダヤ、キリスト、イスラムでは、人間の内面とか、個性というのは神の製造責任の領域ですので、問題視されません。ですから、歴史的に人間の内面の問題はほとんど言及されませんでした。後代になり、キリスト教やイスラムには神秘主義というのがあって、特にスーフィズムというのが出てきます。しかし、これはインドの影響が非常に強いと言われています。いずれにしてもインド思想の特徴というのは、人間のフィジカルな体と、それ以上に心の領域を重視します。<sup>(3)</sup>

でも、実はこのインドと、僕が言っているのは、アリア人という中央アジアから来た、今の『リグ・ヴェーダ』とか『ヴェーダ』を伝えたアリア人ではないんです。『ヴェーダ』の聖典を読んでも、後代になると付け加えられるのでちょっと怪しいんですけれども、『リグ・ヴェーダ』なんか見ていると、心の問題と、この内面はほとんどタッチされていません。神様にお祈りしてゴマすって、たくさん子どもが授かるようにとか、穀物が、牛がたくさん生まれるように、そういうレベルのことです。そうすると、内面というのは問題になってないんですね、あまり。そうすると、どこかにその起源を探さないといけません。というのも、今

のインドの思想にはヨーガを中心として内面的なものが非常に強いんです。どこから来たのかということ、やっぱり注目されるのが、インダス文明ですね。<sup>(4)</sup>

インダス文明には強力な王権があったという証拠がありません。つまり一般的に、王権があれば宮殿だとか、それを守る軍隊があるのです。しかし、武器がほとんど出てきません。つまりインダス文明というのは、東西一〇〇キロ、南北一〇〇〇キロ余りと大変広い領域に分散していましたが、これらの都市で統一した度量衡、都市構造と統一性を持っていましたが、何故か軍隊がないんです。そんな文明他にはないですよ。何故、軍隊を持った強力な支配者なくして、統一性が保たれたのか？ 不思議ですね。そのヒントは、瞑想する王様らしい像から類推するしかないのですが、この像はどうも後代言うところのヨーガ、瞑想しているのではないかと、思われます。これは印章にも出てくるんですけれども。<sup>(5)</sup>

伊東…これは印章に出ていますよ。

保坂…はい、しかしそれがヨーガだと、専門家たちは断定してないのです。残念なんですけれども。しかし私は、ヨーガの原型とっています。いずれにしても、この精神的な世界に入っている人々の内面からコントロールと言いませんけれども、導いている

姿と解釈できません。こういう王様の存在があつて、その深く自己をコントロールした人が、全ての人に命令（念じる）したりすると、人々は内面から彼れに従うというような文化が形成されていたのではないかと考えられます。もし伝統があるとすれば、ずっと後になつて、お釈迦様が出てきた時に、内面をコントロールしていくことが、人間にとつて大事なんだと、こういう発想が出てくる基礎が、すでにインダス文明期以来インドには存在していたと考えられます。そうして、それが顕在化するのが、丁度釈尊が出た時代というのは、伊東先生がおっしゃるような、精神革命の時代です。<sup>6)</sup>

ここで精神革命というのは何かと言うと、物質的な世界からもっと深い、精神の心の内面に入っていく世界です。この時代に仏教だけじゃなくて、インドでもウパニシャッドを含めて、心の問題を深く考えられます。そうすると、体だけで争う戦争のみならず、精神的に争うけんかですね、夫婦けんか、友達けんか、国家間の紛争を含めて、内面からの憎悪であるとか、そういうものをコントロールするということに文化的、あるいは文明的に深い意味を付け加えていく伝統が形成される。つまり、遊牧文化で好戦的なアーリア文化と精神文化のインダス文明という全く違う文化がこの辺りで一つになつて我々が知るインドの精神文化、文明が

形成される。仏教はそのひとつの典型だと考えられます。

その端的な事例を挙げますと、異なる文明が融合する、そしてそれらが融合するためには、「私が正しいとか」、「私だけが正しい」という、自我の絶対性の否定です。アートマンというのを仏教は否定しません。だけどその絶対性は否定します。

伊東…我欲は駄目、我欲は否定します。

保坂…はい、仏教では何事につけて、絶対性は否定しているんです。しかし、その存在は否定しない。つまり「あなたのアートマン」もあるし、「私のアートマンもあるよ」とする。しかしそれは究極的には同じなのですよというような、そういう意味で自我や個の捉え方です。これを「無我」であつたり「空」と表現します。このゴータマ・ブツダの教えには、諸宗教融和、さらには文明融和のキーワード概念があると思います。<sup>7)</sup>

つまり、平和思想の核心ですね。例えば、仏教は世界中に広まります。広まるんですけど、仏教を広めるために戦争はしていません。さらには宗教紛争、今で言うと、聖戦というような概念は少なくとも、仏教には基本的にはありません。最近、オウム真理教みたいなのが出てきて、聖戦みたいなことを言っていますけれども、僕は仏教だと思つていませんけれども。ずっと後代になると、チベットとかそういうので他宗教との戦争に巻き

込まれたりして、護教のためにそういうことを言ったかもしれない。

しかしそれは枝葉です。根本はやはり自己すら絶対視しない、つまり自己の相対化あるいは、自己と同じく、他者を相対化するということにより、心の平安、心を安穩にする、フラットにするという立場をとる。それが行として、肉体にまで出て、それが文化を形成していくわけです。勿論、心は即文化を形成するわけじゃありません。やはり心というのは観念の世界ですから、それが具体的な働き、つまり人間の日常の行為、そういうものをコントロールし、導いてゆく、その結果として争いが少ないとか争わなとか、あるいは他者と共存する、他者を助けるとか、そういう行為となる。いわゆる倫理規範となっていくのです。そういうのが積み重なることによって、文化、伝統ということになっていくんだと思うのです。つまり、人間同士の横のつながり、それも私の孤立的なものではなく、自我同士の相互連関という視点を基礎とするものです。個の関連性を基礎に、人間同士、生き物同士の平和的な相互理解を基本にして、社会を作ってゆく重要性を説いたのが、ゴータマ・ブッダそして仏教です。

そして、僕はブッダの仏教の説いた真理、一般には四聖諦と纏めて言いますが、従来の仏教学の定式化したものだけでなく、こ

れを現代的に云い表わすことが必要ではないかと考えています。

#### 仏教思想の読み直し

その視点から云いますと、仏教の大切な教えのまず第一は、生命の本質的平等を唱えたということです。これはアヒンサーだとか不戦、不殺生、不殺生戒。この人を傷つけない、人のことを重視する、自分と同じように。この中から慈悲が出てくると思うんですね。そこから既存の束縛からの解放。つまり人間の本质は平等だから、差別をしちゃいけませんよという差別の禁止です。これはインドでは典型的なカースト制度というのが、お釈迦さまの時代は、制度としてはなかったかもしれないが、未整備だったかもしれないかもしれません。それは大変厳しいものでした。ですから、社会的な束縛から、既存の束縛からの解放がブッダにより説かれ、仏教の根本思想、倫理的な目標となった。

それから次に、精神の向上を認めるということです。これは、人間は神によって造られた、故にもし素晴らしいものがあるとしたら、すでに神によって与えられている、と考えるユダヤ、キリスト、イスラム的な教えとは異なります。なぜならここには自助努力による人間の向上という考えはないからです。しかし仏教では正しい行為によって、自分が素晴らしいものに生まれ変わって



いく、造りかえられていくんだと考える事です。自己の発見、じゃなくて、自己の形成なんですね。自分は自身の行為によって造られていくべきものなんだと、精神の向上、魂の向上は、自らの責任（因果）によって為されるといふ思想です。正しい行いを通して、高い人格に導かれていくと、こういう自己の成長と言いますよるか、自己の形成と言いますよるか、そういうものを主張したと。

そして第三に、全てのものの相互性の強調です。これは輪廻思想と関係しますが、最終的には、慈悲の心に通じて行きます。つまり、人間は一人で生きているのではないし、第一一人では生きて行けないという認識です。つまり、神と人間だけの関係を第一義とするユダヤ・キリスト・イスラムの様な孤立構造にはなっていないということ。もちろんそれはそれで合理的な生き方ができるのですが。

これは内面性の強調にも通じます。つまり内面をグッと掘り下げていくと、皆が繋がってという発想です。その背景には、インダス文明の世界に通じる伝統があったと言えらると思います。つまり、ヨーガの力でみんなを暴力的でなくコントロールできたという、あのインダス文明の宗教の在り方に僕はどこかつながっているんじゃないかなと思っております。そして、自己の相対化、つ

まり諸々の価値の絶対化の否定です。いわゆる諸行無常ですね。この思想は、価値の対立を超えて、共存してゆくための基本になると思います。

つまり、私が正しい、あなた間違っているというような、自己絶対化の二律背反じゃなくて、私が正しいと思うけど、あなたも正しいかもしれない。立場を変えてみましょうかというような、そういう発想、そこには他者を自己と同様にみなすという発想、それは慈悲の心に通じるものと思います。そうすると、争うということが少なくなるのです。というのも、多くの争いは、自分だけが正しいと思う心から生まれます。一般には、自分が正しいと思うことは、生まれてやはり自己生命を維持するという意味で自己防衛本能によると言われます。しかし、インドでは、「魚の原理」マツチャダ・ルマ (Maccha Dharma) という発想があります。簡単に言いますと、小さな水槽にミジンコみたいな小さいのから、でかい肉食、バスみたいなのをに入れておきます。そうすると、強いものが弱いものをどんどん食べていきます。最終的に一番上のバスが金魚か何か大きな餌を食っちゃいました。このバスは、つまり一番強いものはどうなりますか。頂点に立つ魚は、最後の餌を食べた瞬間、もう次に食べるものはなくなり、死ぬですね。そこでどうするかというと、小さいのは繁殖力が強いか

ら、繁殖できる範囲で食べる智慧、ルールが必要となる。そういうふう順番にして、大きい物が増えないようにコントロールする。コントロールするのは誰かという王様なんです。王様が強い力を持ってコントロールすれば、この魚の原理は防げる。でも、王様が一番強いでしょう。これは王様が自分の権力を正当化するために言ったんです。これはアショーカ王（BC二六八―三三二ころ在位）のおじいさんに当たるチャンドラグプタ（BC三一七―二九八ころ在位）という人がインドをほぼ平定して支配するわけですが、その時に力によって抑えた時の理屈なんです。でもそれだと王があまりにも強くなって、最終的には革命が起きます。アショーカ王は、最初はその原理で強権政治をやっていたのですが、これではいかんと覚った。そこで、魚の原理というものを一歩進めて、一番強い者がわがまま放題にするんじゃないかと、一番強い者こそ禁欲するといましようか、節制をしようと。具体的に一番強い一番下の弱い者のさらに下に身を置くことによって、弱い者から強い者が支配されていく連鎖を止める。和らげる必要があると考えた。そのためはどうしたらいいかという、仏教の自己相対化の思想を取り入れたんです。恐らくアショーカ王は、弱肉強食、これでは世界は成り立たないんだということを実感したんですね。そして、その解決のヒントを仏教に得たのでしょう。だ

から彼は仏教を基本として、政治を行った。まさに権力の循環構造、輪廻です。インドの考えは、特に仏教の考えの基本は全てこの循環構造ですネ。経済でも。

今、経済で富める者を富ましていけば、水がだんだんしたり落ちるように下の人も豊かになりますなということを言っている経済学者がいますけれども、本当にそうかな。二三〇〇年前のアショーカ王、ちよつと勉強した方がいいんじゃないかな。金持ちは絶対手放せません。どんどん集めます。<sup>8)</sup>

ゴールドマンサックスを辞めて、リーマンショックの時のアメリカの財務長官を務めたヘンリー・ポールソン（一九四三）がいますが、彼は退職時に株を売り五〇〇億円の退職金をもらっているんです。四九〇億の退職金なんて、何に使うのと言う前に、彼にとっては恐らく一〇億円もあれば一生楽に。じゃああとの四九〇億はどうするかというと、彼にとっては恐らくバーチャルなんです。

伊東：誰ですか、それは。

保坂：リーマンショックの時に、日本で言う財務大臣を務めたヘンリー・ポールソン氏です。でも余分な四九〇億を払う側の人にはリアルにお金を取られます。世界中の人が六〇億ぐらいの人が一人幾ら、八円ぐらいですか、払わなきゃいけないでしょう。生

まれた赤ちゃんから全人類が八円ずつ、彼のバーチャルなお金のために、吸い取られているわけです。このために飢えて死に直面する人が何億人もでる。これはリアルなんです。リアルを犠牲にしてバーチャルがあるんです。でも彼は、バーチャルな資産の何百億を手放すことはありませんでした。こういうのが魚の原理なんです。こういう発想がやっぱり行き着くところは金融資本主義だと思いませんか。そこには循環の思想や他者への思いやりという発想はないですね。争いは、単に戦争という暴力だけではなく、経済的な収奪や富の不均衡も起源は、同じ様です。

いずれにしても、インドの思想や仏教には、もう価値がないんだと思う人も少なくないと思いますが、これを活かしていくのは、大きな意味があると思います。

これらを総合し、具体的な対応が生まれてくるということになるのではないのでしょうか？

#### 理念から実践へ（梵天勧請の意義）

先ず、根本的な宗教や価値観の差異を超える時にどうしたらいいかというところ、他者を飲み込むというやり方もあります。あるいは他者を抑えて排除する。しかし、これでは暴力が不可避です。仏教ではどうしたかというところ、梵天勧請という考え方がありまし

て、お釈迦さんが悟りを開いた時に、もう僕はこれでいいやと言って、死を選んだと。そしたら梵天、これは梵天というのはヒンドゥーの神様の最高神ですから、ヒンドゥーの神様がやってきてお願いして、そして仏教を開きます。つまり仏教はお釈迦さんの悟りでは完成しなかったんです。この構造の元型はインドで二元論的発想にあるようですが、今回はこっちに置いておきまして、要するに働き掛けがあつて初めて仏教なんです。つまり仏教は他者の助けを求めるといふ形で他者の融和を図った。そして一つの宗教として確立した。だから仏教はどこに行っても争う必要がないわけです。

梵天の代わりに中国で言えば、天でいいわけですし、日本で言えば、八百万の神々でもいいし、具体的には天皇の帰依という形で説明しましょう。つまり、神道の蔡主である天皇陛下が仏教に帰依しても、神道はそのまま残った。むしろ補強されていくわけです。仏教と神道、相争うことは全くなく、お互いに密接に関係し合い一緒にやって来たのが日本の近代までの歴史です。こういうことが相互依存の関係と言いましょか、これはなかなか難しいんですけど、こういうふうには自他の区別をはっきりつけて、他者を排除するのではなく、お互いに存在を認め合い協力し合って繁栄するという発想です。そこには、全て同じ人間なんだ、生命

なんだ。あるいはもっと言えば、人間だけじゃなくて、今の環境問題に転化させれば、あらゆる生命に。人間だけが生きていくわけじゃありません。ご飯食べなきゃいけません。肉、魚も食べなきゃいけないとすれば、そういうものは一番弱い、さっきの「魚の法」になりますからね。そういうものを全部食べちゃったらどうするか。砂漠ですよ、次からは。やっぱりそこに節度が必要であるという発想です。

共存の思想の根本は、やはり自己絶対化ではなく、自己の相対化そういうところが出てくるかどうかなんです。これが私の云う「温かい平和」の思想の基本です。

つまり、仏教のように、自分は他者に生かされているんだ、私とは他者と一緒に生きているんだという発想があると、自己を絶対化する世界よりも争いは減るであろうと思われれます。そして、先ほどの「温かい平和」社会が射程に入ってくると思われません。

### 仏教思想の平和的展開

では、仏教的な発想をもつてしたら平和になるのか、ということですが、日本の事例で考えましょう。かつて天皇家というのは、王位争いを熾烈にやりました。兄弟、親子で殺し合うなんて

いう伝統もありましたけれども。仏教を受け入れるようになってしばらくすると、そういう血で血を洗うような、王位継承、皇位継承というのは、ほとんどなくなりましたよね。だから相手の息の根を止めて、結果的に王朝が断絶しちゃうなんていうことなく、今日までずっと続いておられるというのは、僕はやっぱり仏教の伝統が日本に入ってきたことが大きかったと考えています。そして、入ってくる時期がやっぱり大事なんです。例えば、インドから中国に入りました。中国に仏教が入った時に、中国はすごい文明があったんです。ですから中国文明に仏教が与えた影響というのは、そんなに大きくなかった。心の内面への探求という伝統は、中国にありませんでしたから、それはかなり深く行って、禅だとか浄土とかそういうものはありましたけれども。

しかし、日本に入った時は、聖徳太子の言葉を見ていただくと分かるんですけれども。やっぱりものすごいインパクトがあります。文明と一緒に入ってきますから。まだ簡単に言えば人力車の時代に、いきなりスポーツカーが入ってくるぐらいの恐らくインパクトがあったはずなんです。その展開が、聖徳太子の「十七条憲法」の第一・二条に秘められた精神です。つまり一曰、以和爲貴、無忤爲宗。人皆有黨。亦少達者。以是或不順君父。乍違于隣里。然上和和睦、諧於論事、則事理自通。何事不成。二曰、篤敬

三寶。々々者佛法僧也。則四生之終歸、萬國之極宗。何世何人、非貴是法。人鮮尤惡。能教從之。其不歸三寶、何以直枉。

これは、当時の世界におけるグローバル・スタンダードとしての仏教の文明力の高さに気付いた聖徳太子が、これを積極的に受け入れて日本を平和な社会に築き上げようとする決意の書ですね。ここで、萬國之極宗（よろずのくにのきわめののり）とした点が注目されます。仏教をグローバル・スタンダードとして、日本の国法とするということです。

特に、この仏教というのは、インドから中央アジアから、つまりギリシャ、ローマも含めて全ての要素が融合している。つまり、諸宗教、諸文明融合の教えでした。これが日本に入ってきた仏教です。そしてそれが日本の、未発達な世界の根本にストンと入るんでしょうね。そうすると、仏教的な平和の思想とか、そういうものが日本人の心に深く根付いていく、形成していくこととなります。

もともと日本人はそれほど争う民族ではありませんけれども、争いはあった。そこに、自己を相対化し、さらに精神の向上と欲望のコントロールを通じて成長するという基本構造を教え込んだのです。しかも日本は天皇という至上の、一番上の権力者が仏教を取り入れたのです。これはどういう意味があるのかということ

ですけれども、やっぱり上からの信仰。もちろん下からもあったんですけども、やっぱり上下一体化して、この仏教の平和思想と言いましようか、自他同置、人を他者を敬う、憐れむ、大事にするという発想を基本に置いた。これが和という言葉に集約されていると私は考えています。

#### 和（やわらぎ）の思想の意義

聖徳太子は「和を以て貴しと為せ」というふうに言いますけど、この和というのはどういう意味なんだろう。これは『日本書紀』では「やわらぎ」と読むとなっています。「やわらぎ」という言葉がすごく引っかけりませんか。「や」というのは、これは正確かどうか分かりませんが、副詞で、はなはだしい強調の意味だそうです。「わらぎ」ですね。「わ」というのは、この輪もそうですし、輪っかの輪。それから「わ」だけで平和とかの「和」ですからね、穏やかなことを意味する。和合だそうなので。「らぐ」というのは、接尾語で、「何々を名詞化する」と。「やわ」をらぐんです。「や」は強調ですから、「わ」をらぐんです。つまり「わ」というのは、円環と同じように、とげとげしくなくて穏やかでという意味です。ですからこの「やわらぐ」というのはふにやふにやしているわけですけども、ぶつかりあったりしてこわ

れなし。つまり争わない。若葉のように柔軟で、しかも対応力があって。そういう「やわらぐ」。だから「やわらぎをもつて貫しとしなさい」となるのでしょね。もちろん、未開国から国際社会へ仲間入りしようとする当時の自己認識でもあります。やはり日本古来の発想でもあったのでしょね。

これがやはり、これは聖徳太子という人がいるかどうか、いたかどうか。そして「十七条の憲法」は、聖徳太子が実際に筆を取られたのかどうかというのは、これは文献学者がやればいい話なので、私たちが重要とすべき事は、この『日本書紀』という、国家が認めて編集した、この最古の文献ですね。『古事記』には出てきませんからですけども。

そうすると、この公式文書に出ているということは、この七二〇年に編纂された時には、すでにこういうことが考えられていた、きちつと決まっていたんです。以来、日本はこういうことを、文化の最も基本的な所に置いてきたと。こういう精神をやっぱりもつと重視するべきなんじゃないのかと。

### さいごに

ところが、もう時間がないのですごくはしょっちゃいましたけれども。明治の時に廃仏毀釈をやって、仏教的ないろいろものを

破壊した。これは経済がかかっています。特に仏教的なものを全否定に近くやった。そこらへんはちょっとわれわれ反省しなきゃいけませんけれども、やはり基本は仏教を根本とした千数百年の歴史にある。ゆえに、強引ですが我々はこの長い文化、文明融合の上に立ったインターナショナルな平和論というものを持つていくんじゃないか。それをもつと深く掘り下げて、なおかつ発信していくと。そういう必要が今だからこそあるんじゃないかと思うんですね。敵対して、罰を与えてやるなんて、そんなアメリカみたいなことを言っていたんじゃ、日本はいけません、と僕は思うんです。もうちょっと本当は丁寧によれば良かったんですけど、すいません、時間もオーバーしてしまいました。すみません、これで終わりにさせていただきます。

### 注

(1) この点に関して、専門家は、

① 「平和」のそもその意味は「心理的」なものですが、個人と家族、家族と社会、社会と国家とがなだらかに繋がってゆくのが中国、なかならず儒教の発想です。

② このために平和は「社会的」な意味へと簡単に敷衍されてゆきます。この敷衍の結果の果てが、現在の「平和」の用法です。

語義を体言で「平らかにおだやか」としましたが、漢文は、欧米語のような名詞・動詞で語形が変わるということはありませんので、「平

らかに「おだやかな」「平らかに「おだやかにする」と用言に用いることも可能です。「平和」は「和」を「平」で修飾、あるいは同格です。これも漢文特有の性格で、厳密な区別はできません。

その出典は、『左氏伝』昭公元年「惛惛心耳、乃忘平和。（心耳を惛惛して、乃ち平和を忘れしむ。）」、『史記』樂書「感滌蕩之氣、而滅平和之德。（滌蕩の氣を感じて、平和の德を滅ぼす。）」等々。

以上は、公益財団法人中村元東邦研究所研究員 森和也氏の教え。

因みに、『日本国語大辞典』（小学館）にも、やはり「平和」という言葉の用例は、明治初期辺りのものとなる。

(2) 原稿憲法の序文の一部

日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。（中略）

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

(3) 神秘主義に関しては、井筒俊彦『意識と本質』（慶応大学出版会）、S. A. Abbas, Rizvi 'A History of Sufism in India', Munshiram p. b., 1978., 拙著『シク教とその教え』平河出版社、一九九二年。

(4) 拙著『仏教とヨーガ』（東京書籍）参照。

(5) インドス文明に関しては多数の文献があるが、長田俊樹編著『インドス 南アジア基層世界を探る』京都大学出版会。

(6) 伊東俊太郎『比較文明論』（伊東俊太郎著作集）。

(7) 仏教の基本的な思想研究、特に空の研究では、専門家でなくても読みこなせて、かつ深い思想性を持つ中村元『空の思想』（春秋社）がお奨めです。

(8) 現在のマネタリズム、新自由主義の思想がこれである。詳しくは拙著『宗教の経済思想』光文社新書などを参照。